

妖しの郷

磐田 匠

1

普通であること。誰よりも普通であること。

板野義隆はいつもそう心がけながら二十五年の日々を生きてきた。

特別なもの、特別な価値観、特別な生き方。そんなものは彼が彼でありつづけるために無用なもの、そればかりではなく彼の世界観に反する「悪」ですらあった。

小学校のころから目立つことが嫌いであく多くの友人のなかに埋もれるようにして過ごしてきた。背は高いほうではなく、低いようでもなく。勉強もできるともできないとも言えない。運動も特に得意ではないかわりに苦手でもなかった。

積極的に意見を言うこともなければ、終始無言、ということもない。ほどほどに無難な意見を口にし、ほどほどに笑い、ほどほどに怒る。

勉強にしても体育にしても、でき過ぎても目立つし、できなくても目立つ。

友人は多すぎても目立つし、いつも一人でも目立つ。

目立たぬように、いつもクラスの「その他大勢」の中にいる。義隆はそういう自分が好きだったし、そうであることに心地よさを感じるような少年だった。

しかし彼が中学生になると、周囲の状況はざわざわと変わりはじめた。

友人たちは皆、競いあうように自分自身の「個性」なるものを磨きはじめた。

ある者は髪を長く伸ばしてギターに熱中し、また別の者は髪を短く刈り込みスポーツに熱中する。教室の後ろでは青白い顔をして休み時間にさえ問題集を開いている者。その横にはそれとは対照的に自分をいかに悪く見せるかだけを考えているような者。

義隆は困惑した。俺はいつも目立たずに、級友たちの群れの中に隠れ続けなければならないのに。

彼は髪を少しだけ染めた。金髪でもなく、黒でもなく。

すこし栗色になった髪を長くも短くもない長さに整える。

ワルでもない。優等生でもない。義隆は完全な中庸の海のなかでふわふわと漂っていた。

満員電車のなかでも、街を歩くときでも、義隆は群衆という群れの中にいた。高校を卒業してからは、自宅近くの居酒屋で働いている。彼がこの店を選んだのはフロアが広く、従業員が多いからで、それ以外の理由はなかった。昼過ぎに店に出勤する。人影まばらなフロアを黙々と掃除する。夕方からは他の従業員に混じって食材の仕込みを手伝う。店が開店してからは料理や酒を持ってフロアじゅうを動き回る。

その日も義隆はビールを手に店内を動き回っていた。

「あれ、板野じゃんか」

フロアの客の一人に声をかけられた。

「俺だよ、仲田。高校のときいっしょだったじゃない」

フロアの客の視線が自分に集中する。

「誰？」

仲田の横の女が耳打ちするのが聞こえる。

「高校のときのドーキュー。なんだ、お前、ここでバイトしてたのか」

板野と呼ばれた青年は曖昧にうなずいた。

「店に知り合いがいたなんて、ラッキー。ねえ、板野君だっけ、サービスしてよ」

甲高い女の声に客たちの視線はますます彼に集まる。いたたまれなくなってその場を辞した。その瞬間から彼にとって苦痛きわまりない時間が始まった。

「おーい、イタノオ、ちょっとちょっと」

「ちょっと、お姉さん、イタノ呼んでくれる？」

「イタノ、イタノ、ビールお代わり。イタノのおごりで。ハハ、嘘うそ」

アベックは何かあるたびに、否、些細なことで、否、用がなくとも義隆をテーブルに呼びつける。そのたびごとに大声で彼の名前が連呼される。他の従業員も周囲の客たちも、そのたびにまたか、というような顔で周囲を見回し、彼の姿を探す。彼が血相を変えてアベックのテーブルに向かう姿を確認して、安心したかのようにやっと目を落とす。

二時間ほど過ぎただろうか。アベックが「板野」を呼ぶ回数が次第に減りはじめた。男も女も目のふちを赤く染め、それにつれ彼ら二人の距離は近づいていく。額とひたいが触れ合うほどの近さで会話を楽しむ二人。どちらもが義隆に対する興味を完全に失っている。

そのとき、

「イタノくん、こっちに生ビール、二つ、追加してくれる？」

突然背後から声をかけられた。見たこともない男が薄笑いをうかべながらこちらを見ている。

「早くしてくれよ、イタノくん」

それがきっかけだった。彼が動く場所場所で、まるで魔法の言葉のように自分の名前が囁かれる。板野君ビール、板野くんおあいそ、板野くん追加注文、板野くんさつき注文した鮭茶漬けまだなの、板野くん板野くん板野くん。

アベックに大声で名前を呼ばれてから、静かな日常が壊れはじめた。混乱する頭で彼は仕事を続けた。自分の名前を呼ぶ声は相変わらず続いている。いつのまにか店で働く同僚まで彼に声をかける。板野くん板野くん板野くん。

やめてくれ。

俺はこれまで、誰からも注目されず静かに過ごしてきたし、これからもそうして生きていくのだ。みんなが俺を見ている。みんなが俺の、一挙一動を、表情の変化のすべてを、俺のぎこちない動きの全てを……

見ている。

見つめている。

俺は、見つめられている。

「板野……」

不意に後ろから声をかけられた。今日になって何十回目かに呼ばれる、自分の名前。彼はその声を見殺ししてテーブルをダスターで拭きつづけた。

「板野……」

声が再び呼ぶ。義隆はテーブルを拭き続ける。拭き続ける。拭き続ける。

振り向くものか。俺はここで、テーブルを拭くんだ。頼む、頼む、これ以上俺に声をかけるな。

「板野・・・」

三度目に呼ばれた声を聞いた瞬間、彼は気づいた。彼を呼ぶ声のあたりには仲田たちがいちゃついていたテーブルがある。しかし彼らはとっくに席を立っている。彼らのチェックは彼らに呼びつけられた義隆自身が済ませた。それからはその席には新しい客は通されていない。そう、そこには誰もいないはずなのだ。

「板野・・・」

奴かもしれない。

ゆっくりと彼は振り向いた。やはり奴がそこにいた。さきほどまで仲田が座っていたその場所には一人の和装の男がじっとこちらを凝視しながら座っていた。僧のような黒い着物を着た顔色の悪いその男は、板野の顔を見てにやと笑った。男の顔の中央ばかりと大きな穴があいている。その穴の中からは妙にぬめぬめした球状のものが覗いている。球が一瞬隠され、また姿をみせた。

やはりあれは眼だ。

さっきのはまばたきだ。

この男は顔の中央に目があるんだ。

でも、なぜ？

「板野・・・」

男はもう一度言った。そして水に落とした絵の具が次第にその色を失くすようにふいと消えた。

板野の網膜には男の一つ目と、不気味な笑顔だけが焼きついていた。

2

「しっ！」

兄ちゃんが言った。

「駄目だよ、静かにしなきゃ」

そこは暑く、暗い。

尻の下には、永く干されもしていない、薄っぺらな蒲団が何枚か重ねてある。

だらりと汗がしたたり、落ちた。

「駄目なんだ、かくれんぼの最中は。声をたてないで、オニにみつからないようにしなきゃ」

小声で兄ちゃんが言う。

「目立たないように、こっそりここに隠れていれば、オニはどっかにいってしまうんだ。もし、声をたてたり、音をたてたりしてみつかっちゃったら、二人ともオニに食べられてしまうんだぞ」

ばたん。ばたん。

ごん、ごん。

怒声。罵声。

「お前、泣いてんのか？怖かったら泣いてもいいけど、泣くのも仕方ないけど・・・」

兄ちゃんの声も次第に悲しげになる。

細く開けられた押し入れの襖から、影がときおり横切るのが見える。

「泣くんなら、音をたてないように泣かなきゃ駄目だ。声をあげちゃ駄目なんだ」

兄ちゃんは声をひそめて言った。

「鬼って見たことあるか？俺、鬼の写真、もってるんだぞ」

兄ちゃんはジーンズの半ズボンの尻ポケットから手品のように一枚の写真を取り出した。

写真は雑誌かなにかの切り抜きなのであろう。薄っぺらい紙で、いたるところに折れ目がついている。薄暗いトーンの写真。

写真には異形のものどもが写っている。さまざまな姿形のものども。

異形はそれぞれに名を持っているらしく、横にひらがなで印刷されているのが見える。

漬け物石のような形のいきもの。

(のつぺらほう)

傘に手足と目玉と口がついたいきもの。

(からかさ)

青い長細い顔から獣のような牙を覗かせ、魚のような鳥のような、鱗のような羽毛のような鎧に包まれたいきもの。

(だいもん)

石を思わせる大きな顔に蓑をまとったいきもの。

(あぶらずまし)

それらに混じってその鬼はいた。

青い顔。

醜く突き出た額。

額に隠れて、その目は三日月を倒したような形に歪んでいる。

畜生のような鋭い歯。

下半身は獣のような、短い剛毛に覆われている。

角はない。

「こいつだよ、うちに出てくる鬼は。この鬼が、母さんを・・・」

あおぼうず。

青い顔の異形の横にはそう記されていた。

「母さんを、いじめるんだ」

そのとき、大きな音がして、二人が隠れていた押し入れの戸が開いた。

青坊主が立っていた。

弟がいたような気がする。父がいたような気がする。

朧にかすむ記憶の向こうに、父と弟がいた。

義隆は母子家庭に育った。

彼は小学校の頃、たった一度だけ、父のこと弟のことを母に尋ねたことがある。

母は彼の問いには答えてはくれなかった。

それからは母子の会話にその話題がのぼったことはない。

母によると、義隆は幼い頃、かなりの悪童だったらしい。母はふて腐れる息子連れて、よく近所に謝ってまわったという。彼自身にはそんな記憶はまるでない。母は幼い我が子に向かって、目立たぬように普通であるようにと、呪文のように繰り返していたのだと言う。

父は大きな人だったような記憶がある。

弟とは押し入れでかくれんぼをした記憶がある。

しかしそれらの朧な記憶さえ時間という波にさらされ、風化を続け、今では体験したであろうすべての事象がひとつの黒い殻をもった塊となって心の隅に巣くっている。

そして、父と弟のなにか大事な秘密、思い出さねばならないとても大事なこともその堅い殻の内側に、在る。

それが何なのかはどうしても思い出すことができない。

あおぼうず。

その言葉だけを覚えている。

その名前は霞がかったような記憶のなかで、不思議なほど鮮明に存在している。

中学生のとき。義隆は学校の図書館で自分の心のなかに棲みついているその言葉「あおぼうず」の正体を探ろうとしたことがある。国語辞典にも漢和辞典にも動物図鑑にもその言葉は載ってはいなかった。全巻で二十数冊もあろうかという百科辞典にも記述はない。

あきらめて辞典の書架から離れようとしたとき、一冊の古びた背表紙の本が目についた。

「妖怪図録」

中学校の図書室の、しかも辞書が並ぶ書架の雰囲気にはあわない、一冊の本。少年は吸いよせられるようにその本を手を取った。本は思いのほか重く、厚みがあった。

放課後の図書室は訪れるものもなく、しんとしている。彼以外、部屋を利用しているものはいない。図書閲覧機の向こうでは司書教諭が音もたてずに目録の整理をしている。

近くの机に腰掛けてその本を眺めはじめた。

自分は妖怪という言葉に何を感じたのであろうか。

タイトル通り、その本には江戸時代の画家が描いた妖しのもものどもがひしめいていた。本の趣はどちらかというと、怪奇物好きな中学生のために編まれた類のものではなく、美術作品として妖怪画を捉えている、いわば日本画集のようなものに近かった。

少年の目に映る異形たちは、怪しく、もの哀しく、どこか滑稽ですらあった。ほとんどの妖怪画には、彼には判別できないような筆文字で描者による解説めいたものが書き込まれている。

ひらひらと画集をめくる少年の手が、つと止まった。

「青坊主」

まぎれもなく、そこには記されていた。

そこは寺の境内であろうか。絵の中央に和装の男が立っている。口はだらしなく開き、和装もやや乱れているように見える。描かれているのが魔のものであることは一目でわかる。

男には目が一つしかなかった。一つしかないその目が、少年をじっと見つめている。

「鳥山石燕・画」

頁の隅にそう書かれている以外は何も書かれていない。蚯蚓が這った跡のような解説文も、この画に限っては何もない。

そのとき。

背後でなにものかのけはいを感じた。誰も居るはずのない背後で。息づかいが聞こえる。浅く、荒い。ときどき漂ってくる酒くさい息の臭い。そして、少年を見つめる粘りのある視線。

義隆は振り向かなかった、いや、振り向くことができなかつた。

振り向けば、その魔性のものは間違いなくそこに居る。確信するに足る尋常ならぬ空気。

「義隆」

つぶやくような声が背後から聞こえる。

少年は気づかぬふりをして立ち上がった。妖怪の座る席を視界にいれないようにしながら、重い本を書架に直す。背中から流れ出た冷たい汗がシャツを濡らしている。書架をぐるりと回り込み、棚と棚の間から気配のあたりを探す。喉がからからに乾いている。何者かの後ろ姿が目に入る。ちょうど目の高さあたりにある書架が邪魔になって、はっきりとその姿は見えない。

棚の本に手をかけて背伸びを試みる。まだ見えない。もう少し。手に力を入れてさらに伸びをする。

体重をささえる腕がぶるぶると震える。

それにあわせて、書架の本も小さく揺れる。

もう少し。もう少し。

そのとき手元の本が少年の体重の耐えかねてぐらりと崩れた。

義隆は高価そうな文学全集をまきぞえにしながら、リノリウム張りの床に倒れ込んだ。

バランスを崩し天と地が入替わる光景の向こうで、和装の男がこちらを振り向き、針のような短い髭がみつしりとはえた口許を奇妙に歪めながらにやりと笑い、そして消えるところが見えた。

4

「よし君、今からお母さんが言う話をよく聞きなさい。あなたは何もしていないし、何も見ていない。それでいいの。・・・のことも、・・・のことも、あなたは何も知らない、わかったわね。あとは全部お母さんがうまくやるから。あなたは優しい子だから、今度のことも全部お母さんのためを思ってやってくれたことなんですよ。お母さんには全部わかっているの。だからお父さんが・・・ことだって、あなたには何の責任もないことなのよ。今起こったこと全部忘れてしまうの。そうよ、・・・のことも、・・・のことも、全部忘れてしまいなさい。いいわね。

それと、これだけは約束してちょうだい。これからは、お母さんといっしょに、目立たぬように生きていってちょうだい。人目につくこと、目立つことをすると、あなたも、私も、生きていく

ことができなくなる。あなたが目立つことをすれば、あなたが・・・、・・・があなたに罰を与えてくるわ。でも目立つことのないように、静かに暮らしていけばきっと大丈夫。・・・だ
ってきっと許してくれるでしょう。わかったわね、約束よ」

喋り続ける母のかたわらで、青坊主が眠っていた。

5

バイト先に「あいつ」が現れてからというもの、義隆の行く先々に「青坊主」が現れるようになった。妖怪の現れる場所に規則性などなかった。あるときは電車の隣の車両からじっと見ている。あるときは居酒屋の客席ホールから。あるときは横断歩道の向こうから。

奴の目は義隆に何かを訴えかけるかのような、何かを促すような不思議な眼差しで、じっと見つめている。

妖怪に向かって義隆が歩を進めると、その姿はふいと消える。蜃気楼に向かう旅人のように、彼の行動は無為無力で滑稽であったにちがいない。

魔性のものが消えた後には、いつも周囲のものたちの好奇の視線だけがあった。

父。弟。思い出せない過去。そして青坊主。妖怪が跋扈しはじめてからというもの、義隆は次第にささくれだっていく自分自身の感情を、どこか醒めたもう一人の自分が観察していた。

その日も和装の怪人は彼のバイト先に現れた。

ここ数日、彼はそのもののけを無視することにつとめていた。あれは幻覚か何かに違いない。その証拠に、きつくにらみつければ消えてしまう。つかみかかれば消えてしまう。現れることを止めることができないのであるなら、共存することだ。それくらいのことのできなれば目立たず、静かに暮らしていくことなどできはしない。

「義隆」

「板野」

「お前」

青坊主は呼びかけを続ける。

その度、青年はありったけの憎悪のこもった眼差しでその声に応える。一つ目の坊主は半ば困惑したかのようにも見える表情を浮かべてゆらりと消える。

妖怪が消えたその向こうには、あるときは恐れで、あるときは怒りの表情で義隆を見つめる客や同僚たちの姿があった。彼は憎悪のこもった目のまま、ダスターでテーブルを拭き続ける。拭き続ける。拭き続ける。

仕事が終わっても、妖怪は彼を解放してはくれなかった。

地下鉄のホームで、青坊主はまた彼への呼びかけを再開した。

「おい、板野」

怒りと憎悪がこもった目で妖怪をにらみつける。

意外にも青坊主はひるむことなく、彼をにらみ返す。

「何だよー、お前ー」

青坊主が言った。一つ目はとろんと半ば閉じられ、口許はだらしなく開かれている。そこからよだれとともにだらしなく語尾が伸びた言葉が吐かれる。いつかのような、酒くさい息が容赦なく義隆の鼻腔に入り込む。

義隆は微かに眉をひそめた。

それを見た妖怪はにやりと笑った。まるで自分の勝利を確信したかのようだ。

その瞬間、義隆のなかで何かが壊れた。

義隆はそのにやついた化け物の顔を、力まかせに殴りつけた。

鼻骨が碎けるぐにやりとした感触。

その感触を義隆はなぜか覚えていた。

妖怪は相変わらず笑っている。もう一度、殴りつける。妖怪の顎のあたりがみしりと音をたてる。この音も知っている。

遠い昔。薄い靄がかかった向こうの、感触。

金属質のなにかを通した、人体が壊れるときのこの触覚。

思い出すことを禁じられた、あの日の記憶。

(あの日、僕は弟とかくれんぼをしていた。いや、遊んでいたのではない。隠れていたのだ。)

その後・・・この手触りを感じた。

ゆっくりと青坊主が崩れおちた。しかしその顔は相変わらず笑っている。

周囲ではホームに居合わせた人々がこの突然の暴力劇を遠巻きにして見ている。

見つめている。

俺は、見つめられている。

しかし義隆にはもう自分を押しえつける理性など残っていなかった。義隆は妖怪の腹や胸を力まかせに蹴りつける。蹴りあげる。蹴り続ける。

背後の人だかりから小さな声が聞こえる。

「おい、何だ」

「どうした」

「喧嘩か？」

「止めろ止めろ」

その声に反して、背後の人群に動きはない。

そのかわりに。

見ている。

見つめている。

力がぬけた妖怪の体は義隆の足が当たるたびにぐにやりぐにやりとのたうつように揺れる。

(誰から隠れていたのだ、俺は。俺たちをみつけて、あの襖を開けたのは、誰なんだ)

それでも青坊主の笑いは止まらない。

義隆は化け物の上に馬乗りになった。

笑い続けるその顔に向かって何度も拳をたたきつける。

(開けられた襖の向こうに立っていたのは?)

今はすっかり動きを止めた妖怪を殴りつけながら、義隆は自分の記憶をまさぐり続ける。
今動きを止めたら、この記憶をうめるパズルの最後の一片は永遠にみつからないかもしれない。
妖怪の眉間あたりがいやな音をたてて陥没した。
その瞬間、義隆は兄弟が隠れる襖を開けたその男の顔を思い出した。
(お義父さん?)

襖の向こうには父が立っていた。
弟の英次は父の顔をみるなり、火がついたように泣きだした。
それを見た父は弟の腕をつかみ、押し入れからひきずり出そうとする。
幼い弟は必死で僕に向かって手を伸ばした。
僕も英次の手を握ろうとした。
一瞬、弟の手が僕の手に触れた。小さな手だった。
僕も弟も、蒸し暑い押し入れに長く隠れていたせいで、てのひらに汗をかいていた。
汗で濡れた英次の手は僕が伸ばした手をすりぬけて、父が酒を飲む居間へとひきずられていった。
残酷な父は押し入れの襖を荒々しく閉めることを忘れなかった。
僕は真っ暗な押し入れの中、震えながら声をおし殺して泣き続けた。
父と僕たち兄弟は血がつながっていない。ぼくたちの本当の父は交通事故で死んでしまった。
母は僕たちのために、働きにでることになった。
母がどんな仕事をしていたのか、僕は知らない。
ただ、母の化粧は日に日に濃くなっていった。そしてそれからしばらくして新しい「お父さん」が現れた。僕はもう小学生だったから、なんとなく事情の察しがついた。僕の家みたいに、一人目のお父さんが死んでしまって、代わりに新しいお父さんが来るってこともあることぐらい、わかっていた。その新しいお父さんとも、いままでのお父さんと同じように仲良くやっていかないといけないことも、わかっていた。
でも、幼い弟にはそれがわからなかったらしい。
英次は新しいお父さんの前では決して笑わなかった。
新しいお父さんにはそれが気に入らなかったようだ。
いつの日からか、新しいお父さんは、酒を飲んで弟に暴力をふるうようになった。
その暴力はやがて母にもむかい、やがて僕にもむけられるようになった。
そしてその日。
どん。どん。
ばたん。ばたん。
弟の泣き叫ぶ声。
母の泣きわめく声。
「お前の躰けがなってないから、ガキがこんなになるんだよ」
その日の「シツケ」は、いつもよりはるかに長く、激しかった。

「小便ちびってんじゃねえかよ、このガキ」

どん。どん。

ばたん、ばたん。

がつん。がん。

「ぐえっ」

蛙が鳴くような変な声が出て、弟の泣き声はぴたりとやんだ。

父はこの声を聞いてからからと大笑いし、やがてその笑い声が止まると、大きないびきが聞こえてきた。

僕は押し入れから這い出した。

めちゃめちゃに壊された家具。充満している酒の臭い。

その向こうで、父が眠っていた。

さらにその向こうに、青痣だらけの母と、母に抱かれている英次。

小さなその手は力なく、だらりと揺れている。

母は小声で子守唄を唄っている。

英次はもう幼稚園の大きい組なのに。

子守唄なんかとっくに卒業したはずなのに。

母の目は何かをなくしたような深い悲しみの色。

ああ、そういうことなのかと僕は思った。

もう母を守ってあげられるのは僕しかない。

僕が、あの「鬼」を止めなきゃ。

そうでないと、母も、僕も、いつか、

殺されてしまう。

僕はそのままそっと勝手口に行った。死んだ最初の父が買ってくれた金属バットがそこにあった。

僕は武器を手に、「鬼」の近くまで行った。

母は呆然とした表情のまま、僕のやろうとしていることをじっと見ていた。

むかし、死んだ父と海に行った。そこですいか割りをした。

そのときのことを思い出した。

「棒を大きく振り上げて、すいかめがけて力いっぱい棒を振りおろすんだぞ、義隆」

本当の父の声が聞こえたような気がした。

バットを振り下ろそうとしたとき、母と目が合った。

母は小さくうなずいたように見えた。

「やめろ、こらっ」

小柄な駅長が背後で叫んだ。その声を合図にしたように若い駅員が暴漢の身体を背後から抱えこむ。

「思い出したぞ、俺は。全部思い出したぞ。ざまあみろ」

身柄を拘束された容疑者、板野義隆は相手に向かって笑いながらそう言った。

翌朝の朝刊の社会面を飾るであろう地下鉄H線S駅・衝動暴行傷害事件は、被疑者の現行犯逮捕という形で決着した。

彼に殴られていた初老のサラリーマンは近くの病院に搬送されたが、意識を取り戻すことなく、事件の一カ月後に死亡した。

6

「と、こんな話ですわ」

西陽が遠慮なくさし込む大学の研究室で、若い男と初老の男が向き合っている。

初老の男は安倉敬吾という。都内M署の警部補で、来春定年を迎える。

若い男はこの大学の非常勤講師で民俗学研究家の岩田翔である。

「どうにも私のような古いタイプの人間には、しっくりこないんですわ。最近の、特に若い連中のやらかす犯罪はね。私らがかかわってきた事件には、何かこう、人の業っちゅうか、なにかやるせない、そんなものが感じられたんですがな」

「警部補がお若い頃にも若者の犯罪はあったでしょう。あさま山荘事件とか、妙義山リンチ殺人とか。N事件やO事件なんてのもありましたね」

「連合赤軍事件は公安の事件ですわ。所轄のヤマじゃあないです。N事件もO事件ももっと人間の情っちゅうか、罪の深さみたいなもんが感じられましたですよ。見ず知らずの男を、はっきりした理由もなしに殴り殺すような事件とはわけが違います」

警部補はここで若い大学講師に出された茶をすすった。

「ところで青坊主ってのは何なんですか」

初老の老刑事は眉間を寄せて続けた。

「どうもね、この事件はわし自身が青坊主っちゅうもんをもっと理解せにやあいかと、こう思うんですよ。被疑者の板野っちゅう奴の供述だけじゃあどうもようわからんのです。

そこでわが母校の・・・」

「もの好きにも妖怪なるものを研究している変人に意見を聞こうと、こういうわけですね」

若い男はそう言って小さく笑い、応接ソファから腰をあげた。

安倉は苦笑して、目の前の男を見上げる。身長は百八十ちかくある。ほりの深い、彫刻のような顔だち。やや茶色がかった髪はゆるやかなウェイブがかけられ、どうかすると紅白歌合戦で見た、何やらとかいうバンドの歌手に似ている。

長身の研究者は大きな図版を抱えて席に戻った。

「青坊主。こいつです」

図画百鬼夜行と書かれた本を開いてテーブルに置く。

そこには板野が供述のなかで触れたとおり、一つ目の坊主が描かれている。

「やっぱり妖怪なんですか、こいつは」

「そうらしいですね」

「どんな悪さをするんですかね」

「さあ」

「さあって、先生」

「実のところ、この青坊主についてはよくわかっていないというのが実際のところですよ。この凶画百鬼夜行に絵だけは残っているのですが、それのもととなる伝説や地域伝承が残されていない。唯一のよりどころとなる石燕自身による解説文もみあたらない。画家・石燕による創作なのではないかという研究者もいます。だからこそどんな属性も与えうる妖怪ですね。青坊主は人にとりついて別の人間を殴り殺す妖怪である、と言われても別に驚きませんよ、少なくとも僕はね」

「はあ・・・」

「安倉警部補、妖怪は実在すると思われませんか？」

「は？」

「妖怪です。ゲゲゲの鬼太郎とかに出てくる、あの妖怪です。実在のものと思われませんか？」

「そりゃ、あんた。そんなもん、おるわけないでしょうが」

「そうおっしゃるでしょうね、一般のかたは」

「一般のかたはって・・・じゃあ、おるんですか、妖怪は」

「あなたにとって、今、この瞬間から、妖怪は実在のものになりましたよ」

「はあ？」

「そもそも妖怪というものは、実体のないものです。江戸以前の人々にとって、当時の自分たちの理解を超える現象が起こった場合、それを納得するために、妖怪変化なるコンセプトを作り上げるしかなかった。『天井なめ』、『家鳴り』、『鬼火』などがそれです。手の届かない天井に湿度による染みがつくわけではないし、家族以外誰もいない家が気候の寒暖差で音をたてるわけではない。墓場の死体から燐が気化して、それに発火するなど考えられない。ホワイトアウト現象、やまびこ、ミラージュ現象、既視感。どれをとってみても理屈では説明することができなかった。だから妖怪は誕生しなければならなかった」

学者はここで言葉を切った。老刑事の反応を確かめている。

「やがて妖怪は進化をはじめます。ひとつめの進化は、因果応報思想の影響からくる進化です。生きていうちに悪事をはたらくと、死後、妖怪になってしまうぞとか、妖怪に連れ去られるぞ、とか。いい子にしていないと天狗に連れていかれるという話もこの部類です。悪人が死んだらその魂を迎えにくるといわれている『火車』とか、強欲な人生を送ると、死後も忙しく働きつづけなければならなくなるという『いつまでん』などがこれですね。別の進化もあります。これは民族学的な進化ですが、大陸からの伝承と日本型の伝承が融合されるという進化です。『河童』などは日本のいたるところで出現していますが、その姿形は実に様々です。亀型・蛙型・獣型・それらの混合型などです。獣型の河童は日本古来のものというより中国に伝わっている『水虎』という妖怪に近い形ですね。『竜』や『麒麟』も大陸からの伝承です。『鶴』には竜や麒麟の影響があるようですね。次の進化は民衆による創作です。民話や伝承の体裁をとりながら、実はその妖怪は実在の人物を指しているというものです。それは時の為政者であったり、地方の有力者だったりする。そのものの行状を擬して妖怪にたとえたりする。このように様々な進化を遂げた妖怪はある日、決定的な進化の機会を得ることになります」

「決定的な、進化、ですか？」

老刑事は、自分が若い民族学者の語る言葉にからめとられそうになりながら、すんでのところ

で踏みとどまっているように思いはじめていた。

「今あなたご覧になった、妖怪画ですよ。これによって妖怪たちは実体をもつことになったのです。怪異現象を伝承するにはそれを起こす実体が必要なんですよ。この妖怪画によって口経伝承の段階では様々な形態だった妖怪が、ひとつの姿で伝わりはじめます。さらにその絵と解説文から、地域によっては別の原因から起こるとされていた類似した事例が特定の妖怪のもつ属性として集約されていくことになる。絵というものの持つ力は強力です。それまでは個人の内部にしか存在できなかったものが、その絵を見たものすべてが共有できるようになる。そしてさらに進化する。いるはずのない何物かがそこにいるという怪異が発生するようになる。伝承による怪異が発生しなくとも『そこに何かがあった、いる、いるに違いない』という事件がおこる。妖怪は実体こそないものの、実在するものへと進化するのです。

さて妖怪はどこに実在するのか。もうおわかりでしょう。あなたの脳・記憶に実在するのですよ」

「はあ？わしの記憶に実在する？」

「そうです。今回の板野義隆の青坊主事件に限っていえば、彼の記憶のなかには青坊主という生き物は存在していたのです」

「そいつは幻覚とか、そういうことですかの？」

「他人から見れば幻覚でしょうがね。板野本人にしてみれば、そこには青坊主が間違いなくいたわけですよ。だから殴りつけてでも排除しようとした」

「だから、幻覚だったんでしょ、青坊主って奴は」

「安倉警部。あなたの目の前にいる僕という人間が、絶対に幻覚ではない、現実存在する人間であるという自信がありますか？」

岩田はにやりと笑った。

「だってあんたここにおるでしょうが。わしの目の前におるでしょうが」

「板野もそう言ったと思いますよ。青坊主は目の前にいたとね。」

「でも・・・あんた、そりゃあ・・・」

「板野にとって、青坊主は実在した。あなたにとって、私という人間は実在した。どこも違わないですよ」

男は陽炎のようにゆらりとゆれた。少なくとも安倉にはそう映った。光線の加減でそう見えたのかもしれない。

「あなたが私を現実のものと認識するのはあくまであなたの目であり、脳であり、あなたの主観です。心です。それは私のもつ本質とは全く関係ない。あなたの脳がわたしをあなたの目の前に立つ大学講師として認識しているからそれがあなたにとっての実在です。しかし今あなたの目の前に立っている私は、必ずしもあなたが思う通りの実在であるとは限らない。あなたの脳がそうあってほしいと思い、私の本当の姿を歪曲してあんたに認識させているのかもしれない。板野の事件とは逆に、私こそが本当は青坊主で、私は一つ目であなたを見つめているのかもしれない」

岩田はここで言葉を切った。

「妖怪は自分たちの理解をこえるものを理解するために誕生した。私はさきほどそう説明しまし

たね。人は多くのことを知ったかもしれない。しかしそれでもまだ森羅万象を理解できているとは言い難い。妖怪はね、そういった人が理解できない部分に住んでいるんです。人智の及ばぬ、闇の部分にね」

若い民族学者は席を立ち、窓辺にむかった。空は急速に光をなくしつつある。

「昔はね、妖怪たちが住む場所はいくらでもあったんですよ。闇なんかどこにでもあった。でも今ときたら、妖怪がゆっくり暮らせる闇なんてどこにもなくなってしまった。でもね、彼らは見つけたんだと思いますよ、最高の場所をね」

「どこだと言われるのですか？」

「人の心の中。人の記憶の中。真の闇は意外に近くにあったのですよ」

岩田はもう一度、笑った。

彼のこの笑顔が消えたとき。

自分の目の前にいる若い男は霧が風に流されるようにふいと消えてしまうだろう。

初老の警部補は、半ば本気でそう思いはじめていた。

7

「よし君、今からお母さんが言う話をよく聞きなさい。あなたは何もしていないし、何も見ていない。それでいいの。お父さんのことも、英次のことも、あなたは何も知らない、わかったわね。あとは全部お母さんがうまくやるから。あなたは優しい子だから、今度のことも全部お母さんのために思ってやってくれたことなんでしょ。お母さんには全部わかっているの。だからお父さんが死んだことだって、あなたには何の責任もないことなのよ。今起こったこと全部忘れてしまうの。そうよ、お父さんのことも、英次のことも、全部忘れてしまいなさい。いいわね。

それと、これだけは約束してちょうだい。これからは、お母さんといっしょに、目立たぬように生きて行ってちょうだい。人目につくこと、目立つことをすると、あなたも、私も、生きていくことができなくなる。あなたが目立つことをすれば、あなたが殺した、お父さんがあなたに罰を与えにくるわ。でも目立つことのないように、静かに暮らしていけばきっと大丈夫。お父さんだってきっと許してくれるでしょう。わかったわね、約束よ」

喋り続ける母のかたわらに、眉間のあたりが陥没した父の屍があった。

8

弁護士との面会を終えた板野は、拘置室へと連れられていく。

左右に拘置室がずらりと並んでいる。他の被告たちの前を通り、義隆は自分にあてがわれた小さな部屋まで連れられていく。

「板野・・・」

「義隆・・・」

「よし君・・・」

被告たちは口々に彼の名前を呼ぶ。

青い顔。みつしりとはえた髭。

顔の中央の大きな目玉。

声の洪水に耐えながら、義隆は弁護士の言葉を思い出す。

母の自供通り、義隆の家の床下から、弟の白骨死体が発見されたそうさ。母の死体遺棄と義隆の殺人についてはもう時効が成立しているということだ。

しかし。

弟とともに埋められたはずの、父の骨だけは発見されていないらしい。

弁護士は困惑した表情でそう言った。

「板野義隆、入りなさい」

拘置所職員がふりむいて言った。

いつものように、こいつの顔には目がなかった。顔の中央が陥没して空洞になっている。

あの日の義父と同じ顔で、

男はにやと笑った。

(了)

参考文献

凶画百鬼夜行（鳥山石燕・画）

鉄鼠の檻（京極夏彦／講談社ノベルス）

百鬼解説（多田克己／講談社ノベルス）

百鬼夜行・解体新書（村上健司・スタジオハードMX／株式会社光栄）

ゲゲゲの鬼太郎・妖怪大百科（水木しげる／主婦と生活社）